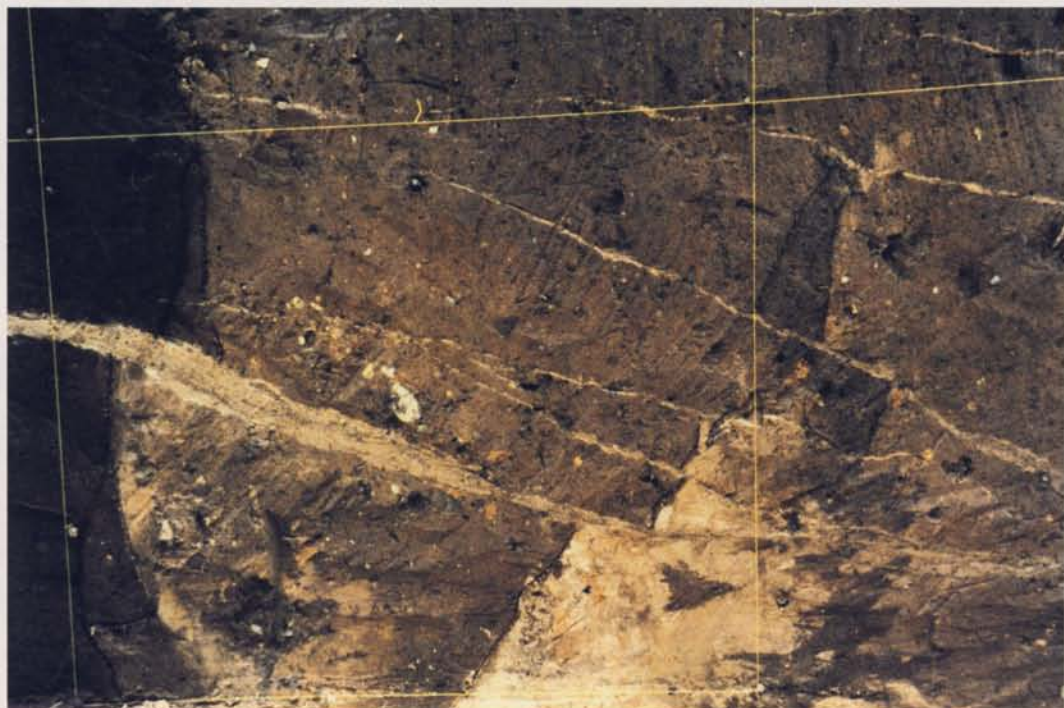


たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No. 33 平成7年3月31日



横に走る噴砂
多摩ニュータウンNo.211遺跡(埋没谷)
町田市小山

地下に描かれた縞模様

写真に見られる縞模様の正体は、いったい何でしょうか。

皆さんは、阪神大震災の影響で、神戸港や未来都市ポートアイランドに生じた「噴砂」という言葉を覚えておられますか。

一般的な噴砂とは、沖積地や埋め立て地などで見られる現象で、地震などの影響で地下水を含んだ砂層に振動が加えられると水と砂が「液状化」し、上層の軟弱地盤を突き抜けて、地下の砂が地上に噴出する現象です。

写真に見られる土壌断面は、多摩ニュータウン区域内の町田市相原・小山地区に所在するNo.211遺跡の埋没谷で検出された横方向に、しかも面的に走る噴砂です。発生した時代は、崩落土中の土器やその後の火山灰堆積から、縄文時代中期以降から弥生時代に至る間に発生したことが明確です。

では、どの様にして、この横方向の噴砂現象が生じたのでしょうか。

この点については、前地質調査所の理学博士 服部 仁氏と地下水説・ジェット噴流説などを現在検討中であります。

今回は、丘陵地の谷部に発生した横方向の噴砂現象の一例を紹介しました。

なお、突然の大地震である阪神大震災の被害を受けられた多くの被災者の皆様、一日も早く元の生活に復興出来ることをお祈りいたします。
(上條朝宏)

遺跡だより④

三吉野遺跡群



古墳時代の住居跡

三吉野遺跡群は西多摩郡日の出町と秋川市にまたがって所在し、多摩川支流の平井川に沿って発達する広大な台地上に立地しています。遺跡の東隣には、学史的にも重要な瀬戸岡古墳群が存在しています。昨年の6月より圏央道のインターチェンジ建設に伴って、本格的に発掘調査を実施してきました。

これまでに、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての住居跡が25軒、掘立柱建物跡が7棟、円形土坑等が400基近く検出されています。また最近の調査で、遺跡内を一边170〜180m程の規模で囲む二本の溝も検出

され、出土遺物から奈良時代頃と推定されます。

集落跡は6世紀後半〜7世紀に集中的に営まれたらしく、有力な豪族層の存在を示すかのように、住居の規模も9mを超す大形のものが数軒含まれています。

遺物は住居跡内から多く出土しています。土師器の坏や碗、甕、甌などの他、須恵器の坏や長頸壺などもみとめられます。また、滑石製の玉や銅製の耳環をはじめ、刀子、鎌、鏃などの鉄製農具や武器類も比較的多く出土しています。

遺物の中で特に注目されるものに、鉄製の馬具があります。馬の口に装着する轡で、19号住から二組検出されました。床面から出土したものは破損していましたが、遺存状態は良くきわめて貴重な資料と言えます。伴出した土器等から、住居跡の時期は奈良時代のはじめ頃と推定されます。

轡は口にかませる銜、銜の両側につく鏡板、手綱を

つける引手の各部からなり、本資料は素環鏡板付轡に分類されます。8の字形の鏡板立間部には、馬の面繫と連結させる刺金を取り付けられていたと思われます。

轡は言うまでもなく、馬を制御する道具ですが、農耕馬の使役にとつてはあまり必要でなく、主に騎用のために使用したものと考えることができます。とすると、当時のムラには、農耕以外の目的で馬を所有していた人物が居住していたこ

とになります。

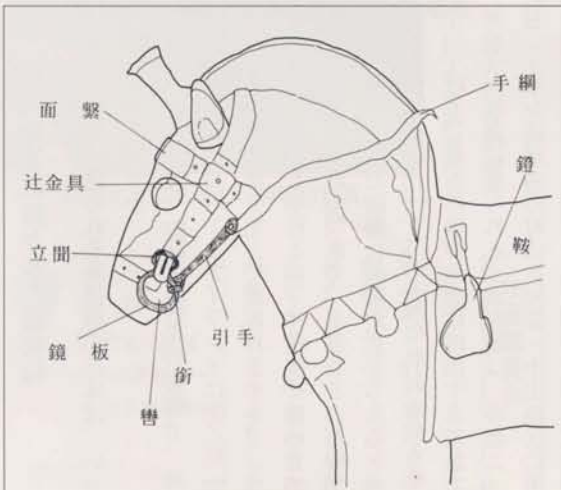
馬具の発見とともに注目できるのが、遺跡内を囲む二重の溝です。未だ全貌は明らかではありませんが、一方を平井川の崖でふさぎ、他の三方を方形に区画するこの溝をいったい何のため

に掘ったのでしょうか。現時点では放牧場を囲い込むための「牧」関連の施設の一部ではないかと、調査研究員は考えています。「続日本紀」文武四年(七〇〇)条に「令諸国定

牧地一放牛馬」とあることからすでに奈良時代以前におかれていたことがわかります。さらに、東国は馬の生産地としてつとに知られ、武蔵国内に四か所の牧が設置されたことが「延喜式」等に記載されています。そのうちの一つが「小川牧」で、現在の秋川市付近の秋留台地上に比定する説が有力です。今後は牧との関連性も十分視野に入れた発掘調査を展開していく必要があります。(松崎元樹)



出土した轡



馬具の各部名称

遺跡だより④

汐留遺跡



土留め板柵 2条 (航空写真)



第1図 江戸図(左)寛永13年・(右)慶長8年頃
幻の江戸百年(鈴木理生著)より転写

土留め板柵遺構とは、江戸時代の埋め立て、造成工事に伴う遺構です。現在汐留地区では、江戸時代の遺構としては龍野藩脇坂家、仙台藩伊達家の屋敷跡を調査していますが、この屋敷跡に伴う遺構の下に土留め板柵があります。板柵の方

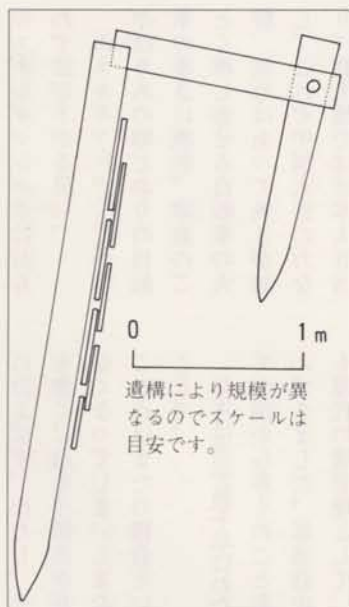
向は屋敷割りに平行か直行する例が多く見られます。この板柵が設置された時期は、第1図の江戸図によると、1603年(慶長8年)以降、1636年(寛永13年)までの期間に限定して考えられます。慶長8年は、徳川家康が征夷大将

軍に就任し、江戸を徳川幕府の拠点とするために、この地の開発に着手した年にあたります。幕府は江戸城の構築や物流を容易にするための手段として、河川の整備、運河、掘割の開鑿を行ないました。これらの工事によって生じた膨大な量

の土砂は、日比谷の入江の埋め立て、江戸前島の整備に用いられました。この大工事により江戸は寛永13年江戸図のような都市に変貌しました。こうして汐留地区は埋め立て地として成立し、幕府から諸大名へ所領地として与えられました。繰り返しになりますが、土留め板柵はこの埋め立て工事に際して設置された遺構です。この遺構はこれまでに調査を行なった区域内だけでも16条確認することができました。この事実は埋め立て工事が一時期に行われたのではなく、遺構の数に比例する回数で徐々に埋め立てられたことを物語っています。

構造は、第2図のように板材を上下方向に重ね並べその前面を斜方向あるいは、垂直方向に杭を打ち、板材を止めています。そして杭の最上部または上部に板材が杭で控えを取り、更に控え材の後方に杭を打ち込んで固定しています。基本的な構造はほぼ一致するようですが、材料の選択、工法がその施行者集団によりさまざまな様相を呈しています。また、この土留め構造は興味深いことに、使用される材料の違いはあるものの、現在の工法とまったく一致していると、土木の専門家からご教授を得ました。

(小林博範)



第2図 土留め板柵模式図

海外研修から



北京市街

が、きわめて有意義な研修をおくることができました。

広大な中国の中、今回は北京と西安の二大都市を中心に、中国社会科学院考古学研究所・故宫博物館・陝西歴史博物館・北京大学、そして天壇公園・秦始皇帝陵など、いくつかの史蹟を社会科学院のスタッフとともに視察。

かねてから計画されていた全国埋蔵文化財法人連絡協議会・関東ブロックの栄えある第一回目の海外研修が実施されました。今回は、悠久の国―アジアの隣国を訪ねて―9月12日から17日までの6日間中国の旅です。当センターからは石井調査研究部長をはじめ5名、他に群馬・埼玉・栃木・千葉の4県から11名の計16名が参加。関東ブロックとして初めての試みということもあって、全てが試行錯誤の繰り返しではありました

この研修で得たものは16名それぞれ異なっていたと思いますが、おそらく全員が共感したものの一つは、やはり何と言っても、強大な軍力と法による支配を基に戦国の世を一気に平定し、中国全土を統一した秦の始皇帝の残した遺産そのものではなかったでしょうか。山間の峰に見渡す限り延々と続くあの万里の長城。その積み上げられた一つ一つの煉瓦に時の重みを感じずにはいられません。そして始皇帝の墓守として作られ、その数数千とも言われる等身大の兵馬備。その立像を目の前にした時、思わず身

を引いてしまふ緊張感が直接肌に伝わり、ただただこの壮大さに言葉を失うばかりです。この兵馬備坑、現在も断続的に発掘調査が進められていますが、すでに公開されていた1号・3号坑に加え、昨年の秋からは2号坑も見学できるようにになりました。

しかし、それについてもこの偉業が成し遂げられたのが、今からおよそ2千年前。日本ではようやく稲作が伝わってきたばかりの弥生時代です。歴史にみる両国間の歴然たる差を見せつけられて、日本人としてはちよつとがっかり。中国人



兵馬備坑

のエネルギーさにおもわず頭が下がる思い。

エネルギーといえは、やはりあの噂どおりの自転車の多さに唖然。津波のごとく押し寄せる自転車の

群、信号はあつて無きが如し、これぞ中国人民の力なり。観光地では日本人目当てのキャッチセール。Tシャツ3枚千円、隣で間髪入れず十枚千円の声、最後には二十枚千円。今思えば買っておけばよかったかなとちよつと後悔したり。観光地での入館料が、外国人と中国人とで格差があるのにもビックリ。外国人の方がおよそ四倍も高い。中国はみな平等と思っていたのですが、

そんなこんなであつという間の6日間でしたが、ともかく全員無事帰国。

今回の研修では、単に異国のものを見聞したにとどまらず、考古学を通じて両国の間にまた一つ新たな友好の窓が開かれたことも大きな成果。そしてもちろん、考古学的成果の数々は言う

におよばず。ただし、それを書くにはもう紙面が足りなくなつてしまいました。この点はまたの機会ということで。

日本は過去数千年にわたつて中国から多くのことを学んできました。私達訪中団も現代の遣唐使として、中国で学んだことを自分のものとするともに、21世紀の新しい社会に向けて広く普及していかなければならないと考えています。

中国で私達が学んだものが、けつして北京ダックの食べ方だけではなかったことを強く確信しながら。

(小薬一夫)



万里の長城にて(全員集合)

平成7年度の展示

例年のように、東京都立埋蔵文化財調査センターの展示ホールおよび廊下において、多摩ニュータウン遺跡群の調査成果を中心に展示の模様替えを行いました。

今年、戦後五十年、多摩ニュータウン遺跡群の発掘調査が開始されてから三十年、「都立埋蔵文化財センター」が建設されてから十年、節目の年にあたります。この三十年間の調査によって、約三千ヘクタールの地域の中に発見された96カ所もの遺跡のうち、およそ9割にあたる遺跡の調査が終了しています。

さて、この節目の年を記念した展示は、三十年の間に発見することのできた、自然や自然と当時の人々のありさまを示すことのできる遺物や動植物の遺体の展示を行ってみました。もちろん、いつもの常設展示を新しく模様替えを行った通史的な展示が主なものとな

ります。

サブテーマは「五万年をさかのぼる自然とヒトの歴史」とし、3月4日(土)

から新しい展示を公開しています。多摩ニュータウン遺跡群の三十年間の調査の中でも約五万年前の旧石器時代の石器群から始まり、江戸時代の陶磁器や炭窯の

発見は多くの新しい知識や見解を私たちに与えてくれました。

昨年度の展示にはありませんでしたが、前田耕地遺跡の縄文時代草創期の住居跡から発見されたサケの顎歯、また弥生時代の墓跡から発見された炭化したコメヤトチノキの実、古墳時代



展示ホール

後期に掘削された粘土採掘坑から発見されたカシヤシイなどの常緑カシ類で作られた鋤、奈良時代から平安時代にかけて作られたトチノキ製の木皿や木皿の未製品なども展示されています。中世にケヤキでつくられた漆器などもあります。

また、江戸時代のコーナーには港区東新橋にある汐留遺跡の伊達藩上屋敷跡から発見された木樋(上水道管)の展示も行っています。この



展示ホール入口

の木樋はもちろん、溜め井戸に上水を導くものですが、多摩川の羽村堰(現在の羽村市)から水をひき、今の新宿区にあった四谷の大木戸から暗渠となり、主に江戸の南半部へ水を供給していた玉川上水のほぼ末端にある木樋でもあります。木樋は地中に埋められていたものため、その土地の状況、その場の施設などにより、いろいろな長さがありますが、途中で濠の石垣があるために上下にわざわざ迂回させたりする例などが知られています。この展示品は汐留遺跡の中でも比較的大きいものの部類に入ります。

この木樋がきれいだった頃の多摩川の水を大名屋敷に運んでいたかと思うと、江戸時代の頃ののんびりした自然と人々との関係を感じてしまうのは私だけでしょうか。

どうぞ、みなさんも、お友だちを誘って見学にお出で下さい。

◀ 汐留遺跡
土留板柵遺構



文化財講演会

11月6日(日)午後1時

30分から中央大学総合政策学部の教授 宮本 勝先生による講演「フィリピンの焼畑農耕集落」が行われました。

長年、東南アジアの山地民の民族的調査を行って、いる先生の調査の中からフィリピンの焼畑農耕民の集落の規模・形態を概観し、ミンドロ島のハヌノオ・マンヤン族の事例に焦点をあて、彼らの集落・村と生活、文化をスライドを交えながら総合的にお話しいただきました。お話しの内容は結論的な部分では定着的密集型集落は可変性がみられるが、双系的親族体系が集落の組織化を困難にさせ、個人を中心とした血のつながりを横に拡張しているという指摘。移動的密集型集落の凝集性は焼畑耕作活動の性格から共業集団の必要があり、少数民族である焼畑農耕民に対する多数民族からの社会的・政治的圧力からリ

ダーの出現と固定化、それと同時に外的圧力に対する回避のための可変性の維持など、多くの興味のあるお話をいただきました。

物質文化についてもお話しいただいたが、植物材料を利用した家などと共に、土器や石器はあまり用いることがないということから、もしこのような集落が遺跡となっても、私たち考古学者はほぼお手上げではないかと考えざるを得ないことになってしまった。しかし、考古学的な証拠を扱う上で興味あるお話でした。

参加者は50名でした。

12月4日(日)午後1時



講演する佐藤副主任調査研究員

30分から当センターの佐藤宏之副主任調査研究員による講演「旧石器時代の集落」が行われました。

動物の狩猟と植物採集を主に食料を獲得する手段としてきました旧石器時代の人類の姿を、世界や日本の具体的な調査・研究例を取り上げながら概観し、縄文時代以降の定住型集落の形成に至る長い生活の歴史とその意味を、住居という側面からお話をいただきました。

参加者は90名でした。

2月11日(土)午後1時

30分から筑波大学の助教 西常木晃先生による講演「西

アジアの旧石器時代集落」が行われました。

西アジアの森は、あまり私たち日本人にはなじみがありませんが、西アジアの植生は森とステップ、砂漠の3つによって構成されているというお話から始まり、石器時代終末期の住居に定住集落の開始がみられ、以後、円形の住居から方形の住居へ変化し、やがて巨大化した集落が成立し、集落の間に格差も生じてきたことなどをお話されました。

参加者は83名でした。

映画鑑賞会

映画「アイヌの丸木舟」の上映を行いました。昭和53年の作品ですが、伝えられた丸木舟づくりの記録映画です。小学生を含め43名の参加者がありました。



発行

財団法人 東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1-14-2
☎ 0423-73-5296
平成7年3月31日